

まなび歴史通信

第47号
2008.6.1

高校で「道徳」の授業を実施して

茨城県では、平成十九年度から「道徳」の全校履修を行いました。

「自分の在り方や生き方を見つめ、人生について考える」授業です。

ここでは、三月十三日（木）に「担当された「大子清流校の先生方の感想」を紹介したいと思います。

（斎藤由美子先生）私は「自分自身を見つめる。心を開くとはどういうことですか。誇りを持って生きる。誇りとは何ですか。自分自身を自慢に思う気持ちです。誇りを持って、プライドを持って生きてほしい。」について話しました。

私にとっての誇りは、三月一日の卒業式で、「旅立ちの日に」「校歌」を、みんなが大きな声で、いい声で歌ってくれた。プラスバンドの指揮をしていましたが、途中、振り向き、みんなの後ろ姿を見ていました。嬉しかった。みんなを誇りに思いました。

（藤田義久先生）大切なものは何ですか。心と形は一致しなければなりません。入院した人のお見舞いに花を持つていく。どんな花を持つていきますか。菊の花はお葬式です。鉢物は、根付いてしまう、退院できなくなってしまうからダメです。心があればいいのではなく、心と形が備わってはじめて相手に伝わるのです。相手を思いやることが大切です。

（小野瀬茂先生）昨年も六月に入院しました。岡田教頭先生に「命の大切さを教えられるのはあなたです。」と言われました。授業の後で、どのクラスも良く感想を書いてくれました。先日も「がんば

つてください」と言いました。ああ心配してくれるのだな、涙が出るほど、嬉しく思いました。

今まで、命を意識したことになかったが、私は、明日、死ぬかも知れない。百人のうち二、五人しか生きられませんと言われた。それを背負っている。今日は元気だが、明日はわからない。命は私にとって時間です。持っているものを出そうと思っています。詩を書いたり、歌を書いている。今朝も二時に起きた。落ち着いて寝ていいれない。自分の出せるものを、全力で出そうと思っています。あきらめないで花を咲かせようと思っています。

（石井久雄先生）人は使命感があつて、死を超えるのではない。生まれてきた意味があり、使命を背負っている。自分はどんな意味を持って生まれてきたのかな。この世の中に無駄な人は一人もいません。それぞれの使命感を持って生まれてきたのです。高校生は生きるために花を咲かせようと思っています。

私も「道徳」で、郷土愛「郷土の先人たち」を話しました。

私は歴史を教えてきましたが、歴史とは、昔の人や今の人「どのように夢を追い、悩み、苦しみ、生きたか。」たくさん生き方があります。それぞれの人に子供時代、青年時代、壮年時代、老年時代があります。それを学ぶのが練習問題だと思います。

そして、「今、世界にたつた一人しかいない自分は、これからどう生きるか。過去と今は変えることが出来ないが、自分の未来はより良く変えることが出来る。」それが応用問題だと思います。

生徒たちは、今、子どもから大人へ、体も心も大きく成長するときです。第二の誕生ともいわれ、自我にめざめ、自分の人生をつづっている時代を生きています。生きているすばらしさを感じて、自分の夢・目標に向かって努力して欲しい。生徒たちにそう期待しながら「道徳」の授業で生徒たちに語りかけてきました。

（野内）

『水府志料』による金山古碑について

大森政夫

水戸藩が文政四年（一八二二）に成稿した水戸領全域の地理志である『水府志料』の中に金山にかかる古碑について書かれてある。

大子組

大澤村

戸凡七十
水戸迄四十二里余

（略）

古碑

金堀共集り居たる時建たる碑也

。碑文左の如し

本願正寶院

願以此功德 普及於一切 我等譽衆生 皆共成仏道

梵字 湯殿山大權現

寛永三丙寅二月吉辰

奥州大澤村一結諸衆等并金山衆

右の如く古き石祠にあり。按するに奥州より金堀りとも來たり居て建たる事なるべし。今此の村も大澤にて奥州大澤村とあるのは、古昔上小川村の内なるを此碑文などよりして、今大澤村と號し事もするべからず

という内容である。



私はこの古碑（石祠）の存在を尋ねてみたくなり、金鉱で栄えた塩沢に入つた。幸いに塩沢坪の知人に会つて、湯殿山の所在を聞いた。話によると、塩沢を少し入つた山を湯殿山と言い、中腹に

寺跡があつて屋敷の塚上に石祠があることを知つた。知人の案内で草臥の細い山路を登つて中腹の平坦な所に着いた。ここが寺跡だという。寺跡から少し離れた塚の上に一本だけ太い松樹があつて根方に石祠が祀つてあつた。石祠は高さ一メートルで部厚い正方形の台座に、四角石柱、その上に重厚な屋根が載つてゐる。屋根は四方に反りがあり、飾り模様が各所に施されている。正面中央には、宝珠玉形と思われる穴が彫られてゐる。石祠の中は、四角柱をくりぬき石仏が納められてゐるというが、正面の穴からは見えない。あるとすれば湯殿山の本地仏である大日如来が祀られてあるものと想像できる。

石祠の全体は、なかなか手の込んだ造形で立派なものである。石室は柔らかいようで彫つてある細字部分が判読し難い。しかし、石祠に大きな破損もなく今日まで原形をとどめているところを見ると、造立が比較的新しい年代のもののように思われた。

さて、石祠に刻まれてゐる文字は、右側面には「寛永三丙寅天保二辛卯二月吉日、是迄二百七年」とある（注□は筆者）。『水府志料』にある五言の願文は、見当たらない。また石祠の周囲には、他の石祠の屋根と思われる破片や平たい石片が、半ば土に埋もれかけているのを見ると、他の石祠が存在したのではないかと思われた。



これらをふまえて、『水府志料』に記載された事項と石祠に刻まれた記録を比較してみると、次の事がいえる。

一、『水府志料』の「本願正寶院」と石祠に刻まれた「水戸

領正寶院」との院名の合致

二、「寛永三丙寅（一六二六）」の年代の合致

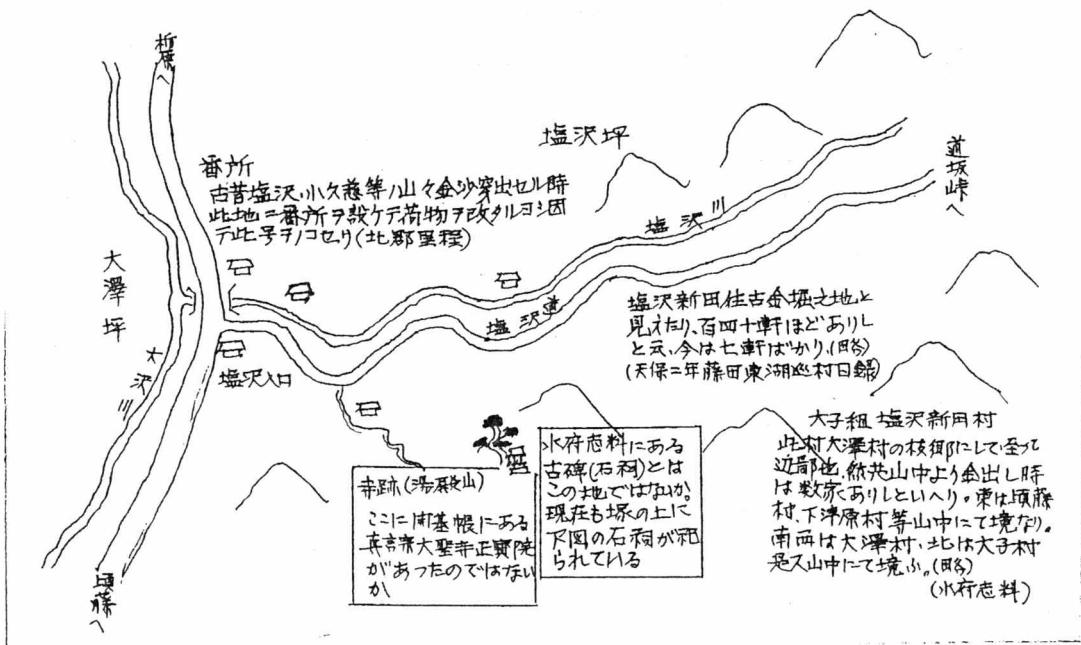
このことから、古碑（石祠）は寺屋敷でもあり、古碑の願文に見られるように崇拝の場として、信徒たちの発願によってこの地に石祠を祀つたものと思われる。しかし、石祠左側面に刻まれた記録「寛永元年 四三月、天保二辛卯二月吉日、是迄二百七年」はどう言うことか。

寛永三丙寅（一六二六）に寺屋敷内に古碑（石祠）が造立された。しかし、長い間に風化して自然に倒壊してしまった。松の根方に破損した石祠の破片と思われる石片があったのは、もしかすると『水府志料』に載つていた古碑（石祠）なのではなかいか。寛永元年 四（一六二四）から二百七年後にあたる天保二年辛卯（一八三一）に関係者、縁故者の手によって現在の石祠を再建して祀つたのではないかと思われる。

ところで、話は変わるが寛文三年（一六六三）の開基帳によると、大澤村に永禄四年（一五六一）開基真言宗大聖寺正宝院（※寶は旧字で同字）金玉山（前小屋村種性院末寺）があつた。前小屋村は、文政六年に泉村（現在の常陸大宮市泉）に改められた（『新編常陸国誌』）。

このことは、『水府志料』の院名と開基長の院名が合致している。塩沢の寺跡には、開基帳にある真言宗大聖寺金玉山があつて金山とともに隆盛を極め、信徒たちから親しまれた寺院であつたが、天保十三年（一八四二）水戸藩の寺社改革によつて、廢寺の措置がとられたのではないかと推察するのは早計だらうか。いずれにしても研究者のご考察をお伺いしたいものである。

塩沢坪見取図



【昭和の初め頃の農家 五】米作り 三 稲刈り

今は田植えが昔より早いから、稻刈りも早くなつて九月には稻刈りが始まる。その頃は田植えは六月の梅雨の頃で、稻刈りは十一月頃が多かつた。麦蒔きやこんにやく植えなどの仕事が忙しかつたせいもあるが、苗作りは春になつてから始まるので、苗が伸びるのを待つと六月になつてしまふのだ。

稻刈りもすべて手作業である。鎌で一株一株刈り取る。五六株で手一杯になるとその場に置き、又次の株を刈る。こうして五、六回繰り返し適当な大きさになると、腰に付けて持つて「束つづら」と言う藁で束ねる。鎌の動きは速く一秒間に二、三株は刈るかと思われる。

数人で並んで刈つて行く間に、稻を掛ける稻だなを作る。二メートルくらいの杭を交差させ、長柄（ながら）を載せて繩で結ぶ。広い田んぼではかなり長い棚が必要である。この長柄や杭は荷車か肩で運ぶので容易ではない。遠い田んぼの場合は特にたいへんだ。そこで刈り取った稻を家まで運んで、家の近くに棚を作り乾燥させる事がある。刈り取つた稻は重い上に何度も運ばなければならないからこれもたいへんだつた。荷車の後押しは子供達も手伝つた。

お休みや昼食を背負つて行くのも田植えの時と同じだ。

稻棚に掛けた稻は脱穀できるようになるまで掛けておく。天候によつて違いはあるが十日から二十日間くらいはかかる。今でも棚がけは多く見られるが、火力乾燥が発達して来るので、コンバインで刈り取りすぐに火力乾燥する方法が多くなつてゐる。機械で刈り天候に左右されず乾燥できるので

農家の労力はずつと楽になつてゐる。

乾燥した稻は棚から外し脱穀する。脱穀も家まで運んで先でやる事もあり、或いは田んぼで脱穀して糲だけを家に運ぶ事もある。その頃の脱穀機は足踏み式だつた。田んぼで脱穀する時は、重い脱穀機を背負つたり荷車に乗せたりして運ばなければならぬ。帰りには脱穀した糲を俵やかますに詰めたから、背負うか荷車で運ぶのでたいへんだつた。

脱穀した糲はまだ十分には乾燥していないので、天気のよい日に筵の上に広げて数日乾燥させる。途中で雨が降つたりすると糲をぬらしてしまふので、天気の良い日にだけ広げる様に気を付ける。

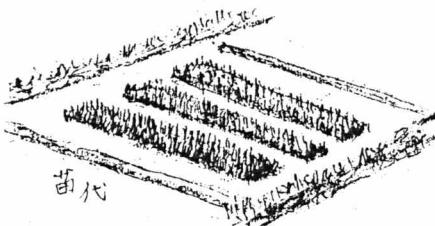
十分に乾燥した糲は唐箕で細かい藁屑やよく実つていない糲を除く。上から糲を入れて唐箕を回すとよく実が入つた糲とゴミなどが風の力で別れて出てくる。唐箕は手で回すのでたいへんな仕事になる。糲を干したり唐箕で糲の風選をするときは子供達も出来る仕事を手伝う。母親一人で糲を唐箕に入れたり回したりするのは容易ではないのだ。

筵での乾燥も唐箕での風選も一日で出来る量は限られるので、この仕事が何日も続く。こうしてよく実つた糲だけが俵に詰められる。俵は冬の農閑期に藁を編んで作つておく。糲の入つた俵は口を閉じ縄で五ヶ所を縛る。普通は糲を四斗入れるが、五斗俵にする事もある。この俵を倉に収めてようやく米作りの仕事は終わる。

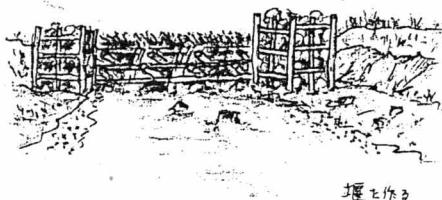
最後に藁の始末がある。全部の藁は大変な量だから多くは藁ぼつちを作つて置く。雨が降つても内部は濡れないで保存されている。馬の飼料や畑の肥料、馬小屋の敷き藁などに利用する大切なものである。これはうるち藁だが、わらじや縄

そのほかのわら細工に利用するのはもち藁である。（石井）

その頃の米作り



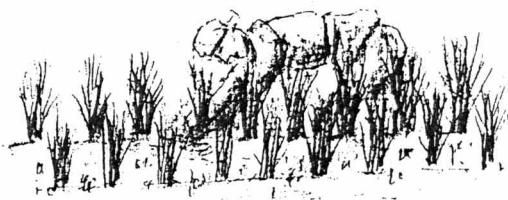
2 精を蒔いて苗を作る



1 堰や水路を直して田に水を入れる



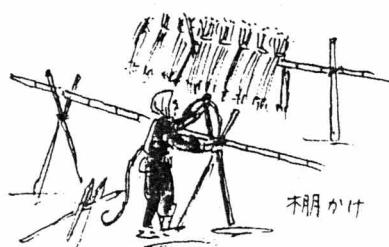
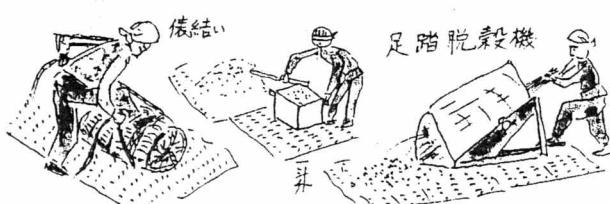
3 田を耕し、代かきをしてから苗を田に植える。子供達も手伝う。



田の草取り

4 稲が伸び、田の草取りをする。夏を越すと穂が出始めやがて稲が実る。

5 秋になり稲が実ると稲刈りをする



7 脱穀して天日で干して、俵に詰める。

6 刈った稲は棚に掛け乾燥する

先祖の八溝山植林事業

旅 沢 藤 兵 衛

感服している。

私の先祖が八溝林業の始祖といわれているが、それは明和年間（一七六四～一七七二）遠州（現静岡県）の秋葉神社へ参詣に行って、神社の境内のうつそうとした杉木立をみて非常に感激し自分のふるさとにも植えてみよう、スギ苗数百株を持ち帰つて植えたのが始めと伝えられている。その当時の当方は、笹や茅等が生え茂つていて人畜も入れないほどだつたろうと思われる。

このことは、郡奉行の高橋多一郎が安政二年（一八五五）九月二十六日八溝山へ登ろうとしたが、「風雨が強くて登ることができず、当家へ投宿した」といわれているから、その折に郡奉行に説明した。

「今を去ること、九十余年のことだ。今日それが周り七〇八尺以上の良木となり、数も千百余本となつた。数百年の後先祖の功績を忘れず、子孫が続いて植え、十余万本の数にすれば、國家の幸となる。書を残すから長く子孫に読ませなさい。祖先の功を忘れるな」と書き残した。また「八溝山は、久慈の水源であるから全部木を伐り尽くすと、水源が涸れて百姓の妨げになるから、全部伐り尽くすな」などと書かれている。

現在の水源涵養保安林の考え方が一五〇年前になされており、

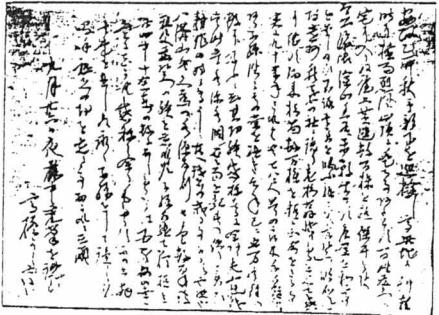
山林の撫育管理は一朝一夕と言うわけにはいかず、本当に気の長い作業で、五十年から百年の年月を要する。八溝山国有林を大々的に植林したのは、私の祖父藤治衛門である。祖父は明治四十二年六月から十月までの間に、固定防火線を設定し、山火事から山林を守る工事をした。その距離は一二、四四五尺におよんでいる。

猪鹿を追い出すのに火を放つて狩猟をしたといわれている。祖母から伝え聞くところによると、作業の人夫から前借りをされて、道具をもつて逃げられたこともある。

植林をするためには、地ごしらえをしなければならない。同年九月から翌四十三年二月まで、三二〇石の地ごしらえを実行した。同年四月末から五月末までに三二〇石の土地にスギ苗二〇万一千本、ヒノキ苗六七万六千本を植林した。当時の作業は、林道や作業道もなく、全部人の背や手作業だったろうからいかに大変だったか想像できる。

植林当時は今のように材価が安くなるとは思つてもみないことだつたろう。今日材価が低迷しているなかで、八溝材の産地銘柄が確立され、市場でも人気が良く、他の材価より高く取引されている。八溝材は狂いが少なく、光沢がある。実際に加工工場へ行つてみるとそれがはつきりわかる。

これにはもちろんの要件があらうが、立地条件、気象条件、撫育管理などによるものであり、材価が安いからといって撫育管理を怠つては折角先人たちの努力により確立した銘柄が台なしになつてしまふ。前述したように五十年、百年という息の長いことであるが、郡奉行が申したように、私達は子孫に引き継いで行く努力が必要と思う。



御山横目付の珍妙な仕事

桜岡滋弥

某月某日、当時久野瀬村（現大子町袋田久野瀬）等の御山横目付職にあつた桜岡源次衛門直方に一通の書簡が届けられた。日付は七月四日とのみ、差出人の名はない。字はもちろん毛筆で達筆といえる。内容から見て告発・情報提供とされる。だから、差出人の名がなく、おまけに書簡末尾に、尚々心配に相也候間手紙受取御済シ願い上奉り候、即ち、気がもめるので破いてほしい、というものである。

密々申し上候然ば先達て佐川氏城下より介川へ廻り候せつ

（中略）

惣次兵衛娘てつ介川御いんきよ様妾に指し上げ候振りにて介川御家老内見に御入に相成 弥取極め近々御引取に相成り候振り大肝物のてつ儀介川に妾に参り居り候はば向後

生瀬郷の大難儀に相成り申す可と存じ奉候尤も先妾の一件にては黄相院様江南迄御連の上重役三人介川にて追放に相成り候其の跡妾之大肝物妾のてつ指上候ては甚だ相済ず儀と存じ奉り

（中略）

何れ久野瀬村御地頭様に御座候はば此の大難済御配慮の上早速御救御取計い願い上げ奉り候（以下略）

この書簡の内容を解くカギのひとつは、黄相院様の四文字。

黄相院様とは水戸家九代藩主徳川斉昭の息女の一人祝姫のことで、祝姫は介川城主九代山野辺義正の内室となる（嘉永六年二八才で死去）。書簡中の介川御いん居とは、山野辺義正の父義したがつて、件の年代も判明していく（義正は嘉永二年二六観と考へると、件の年代も判明していく（義正は嘉永二年二六

才で死去）。

さて、この書簡の大意は次のようになろうかと思われる。

内密に申し上げます。先日佐川が水戸城下から介川館（海防陣屋。一万石。最上氏の一族。初代山野辺義忠は最上義光の四男。寛永十三年に水戸藩徳川頼房付家老となる。七代山野辺義質の代に介川館を海防陣屋とする旨のお達しがあり、八代山野辺義觀兵庫頭の代に転居。このときの臣下侍二十八騎、足輕若党八十七人、手廻り雜人百三十人。介川、宮田、会瀬、成沢、諏訪、折笠、小生瀬、大生瀬、三ヶ草、久野瀬各村が知行地。ただし、知行地内では浮役のみ、年貢、諸仕置は水戸藩郡奉行の扱い）へまわり、佐川惣次兵衛は娘てつを連れゆきましたが、そのとき娘を山野辺義觀様の妾に指しあげたいと御家老に内見してもらつたところ、なかなかよろしいではないか、殿もお気に入りのご様子ということで話がまとまつたようでございます。

悪ものてつが殿様の妾などになつたのでは、今後、生瀬郷（小生瀬、大生瀬、三ヶ草、久野瀬の四ヶ村をさす）の人たちは、調達金など運上ものが増えて、困難の極みと、ごいんきよ様（山野辺義觀）は以前にも妾がおりましたが、御子息義正様の内室黄相院様が御立服、水戸城下江南まで連れて行つて吟味させ、重役ら三人を追放した例もあります。大悪党のてつが御いんきよ様の妾になつたなら、これは一大事。貴殿（桜岡源次衛門）は、久野瀬村の地頭＝庄屋でもあり、この大難儀をよくよく御考えのうえ、さつそくにもお救いあらべく、御願い申し上げます。

御山横目付は、藩営の山林、村々の分附山等の管理監督するのが役目かと思つていたが、以上のような殿様の色の道にまでかかわりをもつとは意外である。

山野辺義觀は弘化二年（一八四五）、水戸藩主徳川斉昭が幕府から謹慎させられたとき、その補弼の責任を問われ隠居する。林谷と称した。義觀は安政六年（一八五六）一月に五九歳で死去している。

祝姫は嘉永六年に二八才で死去しており、しゅうとの先妾を追放したのが、嘉永年間のはじめの頃、そして件のできごとを報じたこの書簡に入れるにすれば、弘化二年から安政五年までの間のいざれかということになる。

ところで、問題の佐川てつは、生瀬郷四ヶ村の内のどの村の生まれか。書簡では久野瀬村の出身のように書いてあるが、現在の大子町久野瀬の佐川家二軒には先祖にてつの名をもつ家はない。当時の御山横目付桜岡源次衛門は、単なる風聞書かもしれないこの件を果たして調べあげたか。役目ならば一応の調べはしたであろう。

私の得たところによれば、佐川てつは、天保元年（一八三〇）四月十八日、現在の大子町小生瀬の生まれである。明治二十年（一八八七）二月、現在の日立市友部、土族樅村賢介に嫁いだ。後妻である。

当時、樅村家には当主猪之介夫妻の他、同夫妻の二人の息子、猪之介の母、祖父がいた。てつはこの祖父の後妻である。尚、猪之介の父行義は政府軍の一人として、函館表脱走追討戦に加わっている。

明治二年六月、褒賞として短刀一振りを頂戴し、藩政時代は家禄三十俵だったのが、五斗減らされて「十五俵賜ハル」と旧十王町（現日立市）所蔵の文献にある。五斗減られたなら二五俵が正しいはずであるが……。

旧十王町には樅村を名乗る家は多いが、往時のことを知る人はいない。そういうえば、日下部伊佐次の母も樅村家の出という。

編集後記

平成二十年度に入り、去る四月二十六日に遊史の会の諸先生方にお集まりをいただき、今年度の主要な事業について検討をいただき、左記の内容で進めることになりました。

記

一 「ほない歴史通信」の発行

一 満洲移民関係の資料収集及び研究

一 ふるさと歴史講座現地めぐり

郷土を知ることは、自分自身を見つめることです。郷土にはぐくまれ、私たちは、生きています。先人が努力し、築き上げた歴史や文化の中で祖先も生活してきました。言葉や食文化も

この「ほない歴史通信」をご覧になれば、先人たちの残した足跡と、その歴史の壮大さに鑑み知ることを楽しんでいただけだと思います。

（佐藤治身）

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（茨城県立日立商業高校）

石井喜志夫（元教員）

小澤 圓彦（元教員）

佐藤 治身（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町池田二六六番地